

## はしがき

### ■編集の趣旨

本書は、《集中2週間完成》シリーズの一冊として、古典文法の中でも大学入試の出題頻度が高い「助動詞」「助詞」について、演習問題を解きながら知識を整理することを目指して編集しました。基本的な文法事項を一通り学習した上で、さらに古文読解に際しての重要な文法力、受験に即応した文法力を確実に身につけたい、と考えている皆さんに最適です。

### ■本書の特長

- 1 学習日ごとに見開き二ページに収め、「助動詞」「助詞」をそれぞれ七日間ずつで学習できるように振り分けました。
- 2 右ページ上段に、「まとめ」の欄を置きました。助動詞はそのすべてについて、また助詞は重要語を中心に、文法的意味と口語訳を掲げ、記憶すべき事柄を明確にしました。(なお、現代語に近い格助詞と副助詞の一部は、左ページ下段に略記した。)
- 3 右ページ下段の「基礎演習」では、すべて典型的な短文による練習問題によって、基本事項を確認します。
- 4 左ページの「発展演習」は、近年の大学入試問題の中から当日の項目に該当する設問を選び抜いて構成しました。一部改変したのもありますが大幅な変更はしていませんので、これにより入試のレベルや傾向を知ることができるでしょう。

5 付録1として、「まぎらわしい語の識別一覧」を付けました。

本文を補うものとして活用して下さい。

6 付録2として「助詞一覧表」、付録3として「助動詞活用表」を付けました。これらも随時参照して、個々の助動詞・助詞を確実に覚えるようにして下さい。

7 「別冊解答書」には、自学自習でも十分理解が行き届くよう、「解答」のほかに、丁寧な「解説」と問題文すべての「口語訳」をつけました。

「解説」には、本文で触れられなかった重要知識に言い及んでいるところがありますので、ぜひ熟読して下さい。

また、文法問題はできるだけ文法的な処理だけで解答を導きたいとの考えから、問題本文にはいっさい注やヒントを付けませんでしたので、解釈の上で疑問がわいたら口語訳を参照してほしいと思います。

本書によって、皆さんの古典文法の力が確実に一段進歩することを期待しています。

編著者

## 目次

第1日	過去・完了の助動詞	4	第10日	接続助詞(2)	22
第2日	推量の助動詞(1)	6	第11日	副助詞	24
第3日	推量の助動詞(2)	8	第12日	係助詞と係り結びの法則	26
第4日	推量の助動詞(3)	10	第13日	注意すべき係り結び	28
第5日	打消・打消推量の助動詞	12	第14日	終助詞・間投助詞	30
第6日	断定・願望・比況の助動詞	14	付録1	まぎらわしい語の識別一覧	32
第7日	受身・使役の助動詞	16	付録2	助詞一覧表	36
第8日	格助詞	18	付録3	助動詞活用表	38
第9日	接続助詞(1)	20			

【き】

①過去 …タ

\* 直接経験の回想に用いられることが多い。

【けり】

①過去 …タ …タソウダ

\* 伝聞の回想に用いられることが多い。

②詠嘆 …タナア …コトダヨ

\* 主に和歌・会話文の中で用いられる。

【つ・ぬ】

①完了 …テシマウ …テシマッタ …タ

②強意 …テシマウ キット… タシカニ…

\* 主として下に推量の助動詞を伴って用いられる。

つべし つらむ てむ てまし  
ぬべし ぬらむ なむ なまし

③並列 …タリ…タリ

\* 中世以降の用法で、次のかたちで用いられる。

〈…つ、…つ〉 〈…ぬ、…ぬ〉

【たり・り】

①存続 …テイル …テアル

②完了 …タ …テシマッタ

\* 「り」の接続は特殊なので注意する。

〈サ変・未然形〉〈四段・已然形〉のみ。

■発展演習

1 大齋院と申すは村上の御門の御女なり。その時、小野宮右大臣、大納言にて、祭の上卿にて、本院に参りて客殿につかむとせられけアを、「申すべき事あり、まづこれへ」とおほせられけイば、御前へまゐられたるに、御簾の内に茵しほしきて、女房つたへおほせられける、「中宮よりいろくの扇を給はせたりつる。つかひ、少将雅通なり。女房とゞめつウども、ひきはなちてにげぬ。ねたき事なり。いかゞすべき。この事いひあはせむとてなむ」とおほせられければ、大将申されける、「明日、列見辻にて参りたエん時、今日の禄を給ふべきなり」。中宮よりの御ひあふぎ取出でてみせさせ給ひけり。女房とりつたふとて、御簾にかほをかくして、身はあらはにていでてなむありけオ。そのふるまひ、たよりあり、えんに見えけり。  
(続古事談)

問 空欄ア～オには、「ら行」の一字が入る。入るべき一字をそれぞれ記入しなさい。

ア					
イ					
ウ					
エ					
オ					

■基礎演習

次の文中、傍線部①～⑦の助動詞について、文法的意味と活用形を答えなさい。

(1) 坊のかたはらに大きな榎の木のありければ①…

(徒然)

(2) いと思ひのほかなりしことなり②。

(方丈)

(3) はや船出して、この浦を去りね③。

(源氏)

(4) 潮満ちぬ。風も吹きぬべし④。

(土佐)

(5) 道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ⑤

(新古今)

(6) このわたりに見知れる僧なり⑥。

(徒然)

(7) つばくらめの、巣くひたらば告げよ⑦。

(竹取)

2

按察使の上、聞き給ひて、「さればよ、はじめより思ひしことぞかし。いま一つも大人しくものし給ふを、引き越し給へる御心のひがひがしさにこそ」とのたまひて、「踏みとどろかし鳴る神も、とこそいへ」と、大人しうのたまへば、母上、「君たちは知り給はじ。故殿の幼くより后とかしづき給ひしかど、はやく遅れ奉りにしかば、報なき人と知りなき。また故殿のとりわけらうたうし給ひしも、この御乳母の少納言を若くより思しき。少将をも殿の御子とこそ人はいひしか。さればにや、なべての女房には似ず、まみ・口つきのよしめきたるも、君たちにうち通ひて、にくからぬさましたり。されば、殿も失せ給ひぬ。少納言も今はなし。ゆかりにくしとにはあらねど、心づきなしと見しゆかりなればにや、よかれとは思はず」とのたまふに、…(中略)…  
さて、三の君にも、「心得給へ。中納言の、世とともに恋ひ悲しみ給ふ人は、中の君なりけり。もし問ひ給ふことあらば、『いづくへかおはしけん。田舎の方へと聞きしが』とのたまへ」とぞいひ含め給ひける。  
(木幡の時雨)

問 二重傍線部ア～オの「し」のうち、文法上同じものを二つ選び、記号で答えなさい。

--	--